

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 29 日現在

機関番号：10102

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2011～2012

課題番号：23720032

研究課題名（和文） 民俗世界における身体観と受療行動に関する研究 ―現代バリの呪術・儀礼・死生観

研究課題名（英文） Research on the view of body and medical treatment in Balinese cosmology. - Magic and Rituals, the view of life and death in modern Bali.

研究代表者

村田 敦郎（MURATA ATSURO）

北海道教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：80442060

研究成果の概要（和文）：治療行為を受ける際に、基盤となるのが身体である。それはバリでも同じだが、彼らの場合、生身の肉体のほかに、「みえない身体（魂）」という概念を設定し、これが健康に大きく影響すると考える。「身体」がどのように概念化されているのかを知ることは、身体観のみならず健康観、病観、社会的成熟、身体に関する民俗的な浄と不浄、さらには死生観にまで連関して理解することが必要となる。本研究では、通過儀礼・葬送儀礼・治療儀礼の事例から民俗世界における身体観を明らかにし、なにゆえ儀礼にまつわる身体観を表現する文化的イデオロムが存在するのかを考察した。

研究成果の概要（英文）：When people consider the view of body, first of all, a body as a living biological existence cannot be ignored. The view of body in study starts from a real fresh-and-blood body and develops into technique of body such as manual technique, mutilation, beauty and ugliness of appearance, sense of values, and outlook on illness. This diverse views show that a human body is not simply an object as a living creature. A variety of bodies exists with social implications and values.

The subject of this paper is the social body related to rites, in particular, out of various social bodies. The area to study is Bali of the Republic of Indonesia, and targeted rites are initiation and funeral ritual, which are rites of passage, as well as healing rituals.

"The invisible body" is similar to the concept of "the soul" when translated. The people of Bali consider the invisible body as true self. However, this idea is different from the Western mind-body dualism, because the soul is tied to a body but not directly connected to mind among the people of Bali. This research will organize Balinese original, folk views of body and clarify the reason why invisible body needs to be assumed through initiation, funeral ritual, and healing ritual.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
交付決定額	800,000	240,000	1,040,000

研究分野：宗教学

科研費の分科・細目：宗教学一般

キーワード：身体観、民俗医療、儀礼、呪術、病、社会的成熟、死生観

1. 研究開始当初の背景

申請者は、1998 年からバリ島におけるフィールドワークを開始し、バリの民俗医療と死生観にかかわる研究を鋭意発表してきた。日本に住む人々ならば自己責任と捉えるような事項まで、バリの人々は広く「災厄＝病」と考える傾向にあることがわかった。それは自分で判断することではなく、呪術医や占い師といった民俗社会における文化的権威や憑依や呪物などの文化資源を駆使して、「病」に対応する姿がみられた（村田 2003；2004；2005）。また、バリの人々は「病」を診断する際に、自然科学的な（いわば生物としての）身体だけを判断材料にするのではなく、魂の喪失やみえない世界（神霊や黒呪術師）との関係をも包含した世界観から「病」を構築することが明らかになった。インドネシアにおいては、近代医療にくわえて、民俗医療が数多くの人々にいまだに実質的な医療サービスを提供し続けている。近代医療施設が利用できる状況にあるバリでさえも、民俗医療は人々にとって重要な位置を占めている。

医療人類学では、なぜ近代医療と民俗医療が並行して利用されるのか、なぜ民俗医療の持続が可能なのか、を問うてきた経緯がある。たとえば吉田正紀（『民俗医療の人類学』古今書院、2000）は、インドネシアには今でも慢性病のようなさまざまな肉体的心理的病気や、ストレスのあるライフ・スタイルによって生じた不安が人々の中に満ちており、民俗医療者のところに来訪するクライアントの大多数は、近代医療に対して不信感をもっているという。彼らの多くは病気が長引くと、近代医療は不十分と感じ始め、超自然なものなどに原因を求める傾向にあるというのである。そのような状況で、彼らは民俗治療者を、診察にもっとも適したものとみなすようになる。吉田は、病気と治療の文化的モデルは、民俗治療者と彼らの仕事の存続にきわめて深い関係であることを明らかにした。しかしここで、なぜクライアントと治療者との間に、文化モデルの共有を可能にする密接な関係が維持できるのかという疑問が残る。この疑問を起点に、申請者の現在までの研究では、他の民俗医療研究や身体論ではみられなかった 1 つの事例を多角的な視座から分析し、時系列的な過程の研究をおこなうこととした。

本研究の前段階として申請者は次のような予備的研究結果を得ている。

(1) バリのある家族に起こった「病」を題材に、人々がどのように受療行動をし、儀礼をおこなうかについて、時系列的に記述した。

その中で、人々がどのように近代的な制度や機関、伝統医療などを用いるのか、そして病や事故、人間関係の不和などに対して、呪術医や占い師をいかに利用し、解釈をおこなうかを明らかにした（村田 2003）。

(2) 日本では、精神障害とみなされかねない「憑依現象」は、バリの人々にとっては、単純な病ではなく、お告げや警告などの重要な意味をもっている。被憑依者と周囲の人々のコミュニケーションプロセスを考察し、憑依の語りの相互作用を明らかにした（村田 2004）

(3) 呪術的なものが物的証拠になるのなら、それはどのような状況か。私たちが考える論理性、たとえば演繹や帰納的なものとはまた異なる思考方法（アブダクション）があることを、「呪物」と人々の「語り」を通して明らかにした。またなぜ呪術が近代の法制度の中で存続するのか、開発医療と民俗医療の関係性を明らかにした（村田 2011；2006）。

(4) バリ独特の心身二元論や、魂の遊離とその招魂儀礼、魂の輪廻、魂と家と村との結びつきなどの民俗事例群と、近代化による画一化された「教義」的な死生観との共通性と差異を示し、「近代的な身体」を総体化する考察をおこなった（村田 2008）。

以上、四つの視座を研究するうちに、総合的な民族誌を作成する必要性をもつにいたった。

本研究はいまだに明らかになっていない「バリの人々の身体観を通じた受療行動、死生観」を解明し、基礎データを収集したうえで、代替医療や開発医療などの研究に応用できるような基盤的研究をおこなうことを旨としている。

2. 研究の目的

申請者はこれまでインドネシア共和国バリにおいて、民俗医療を中心としたフィールドワークをおこない、呪術治療、憑依、儀礼論の研究を進めてきた。本研究は、バリの人々の「自然科学的な身体観」とは異なる「宗教的身体観」を明らかにし、彼らの近代医療も含む受療行動の傾向と死生観がいかに構築されているのか、その文化モデルを確立することが目的である。

本研究は、研究史的には民俗医療、儀礼論（通過儀礼・葬送儀礼）、死生観など多岐にわたって展開する研究となっている。これらに通底するテーマが、身体観といえる。これらの研究はそれぞれでは個別に多くの蓄積があるが、これらをホリスティックに記述研究した例は、管見によれば皆無に等しい状況である。本研究の目的と意義は以下になる。

(1) 民俗医療の側面：身体を通してバリの

人々の「健康観」「病観」を明らかにする。民俗医療者の語り、近代医療者の語り、クライアントの語り、その家族の語りなどのように相互参照され、「病」の概念を形成するのかを明らかにする。

(2) 儀礼の側面：バリの赤子に対する入魂儀礼、成人儀礼である削歯儀礼、結婚儀礼、葬送儀礼、祖霊の浄化儀礼における身体観を分析する。現在までの研究では「ケガレ(seber)」という概念で分析されることが多かったが、本研究ではバリの人々がどのような語りと行動をもって、社会的成熟の印とするのか。儀礼と身体の成熟の関係性を、死後まで含めて考察する。

(3) バリの人々の心身二元論：バリの人々は重病に倒れる、あるいは事故に合うと魂が体を離れたと考える。魂の離脱が即、死につながるわけではないが、彼らの健康に大きな影響を与えるとされる。日本に住む人々の多くは、健康や病を語る際、生物学的に身体のみを問題にするが、バリでは身体だけではなく「魂」を含めて考える傾向にある。身体と魂の関係性を明らかにすることで、彼らの心身二元論を定義したいと考えた。さらに彼らのカルマにまつわる「障害」の概念を明らかにし、身体と時間の関係性を明らかにする。

(1)～(3)の各論の研究は進んでいるが、「みえない世界」を含めた総合的なバリの身体論は未解明といえる。これらのテーマに重なる身体観を中心に民俗医療や儀礼、死生観を総合した民族誌を創り上げることを目的とした。

3. 研究の方法

本研究では

(1) バリの人々が、どのように民俗医療と近代医療を利用しているのか、受療行動の様式と「病」の認識の方法

(2) バリの通過儀礼や葬送儀礼での「身体」の扱いや言説を整理し、身体の社会的成熟を解明

(3) バリの人々の「身体」と「魂」をめぐる言説や儀礼の解明

について並行的に研究をおこなった。

具体的には、現地語を使用するフィールドワークでの調査を敢行し、現地の方々との対話による1次資料の収集をおこなった。現在までの研究では民俗医療を研究する場合、呪術医(占い師を含む)あるいはクライアント、どちらか一方の視座を中心に分析されることが多くみられた。本研究は、この両方から双方向的に調査を進めることに加えて、近代医療施設や特別支援教育施設の関係者への調査も行った。

インフォーマントについては、申請者が懇意にしている呪術医と占い師から紹介していただき、また近代医療を利用する人々も予備調査でお世話になっている病院からインフォーマントを紹介していただいた。それぞれの調査対象者から、病観と身体観の聞き取りを進め、その共通性と差異を明らかにするためである。現在までの調査では、バリ人の近代医療者の多くは呪術などの代替医療を認める傾向にあり、ヒンドゥー教的身体観が強く影響していることが明らかになったといえる。さらに障害者とかかわる特別支援学校の教諭への調査でも、「障害」の概念説明において、カルマなどの言説を使用することが多くみられた。多くの民族誌では、広く民衆の「近代」を意識した記述は見られるが、具体的な知的階層や職業に沿った傾向性をみいだすような研究は皆無であった。

(1) 民俗医療のみを使用する人 (2) 民俗医療と近代医療を併用する人 (3) 近代医療のみを使用する人 (4) 民俗医療施術者 (5) 近代的な制度にかかわる医療関係者・教育関係者への具体的な調査をおこなうのは、知的階層を越えた共通性を把握する良き資料となりうると考え、調査をおこなった。

4. 研究成果

本研究の契機となる研究成果は、2008年8月に14日間の調査をおこなったものである。バリ・ポスト新聞社にて宗教問題に関する資料収集、葬送儀礼における共同体に関する調査をおこない、10月にその成果を『死生学研究』(vol.10)、東京大学21世紀COEプログラム「生命の文化・価値をめぐる死生学の構築」にて発表をおこない、バリ人の治療儀礼や魂観についての基礎研究を発表した。

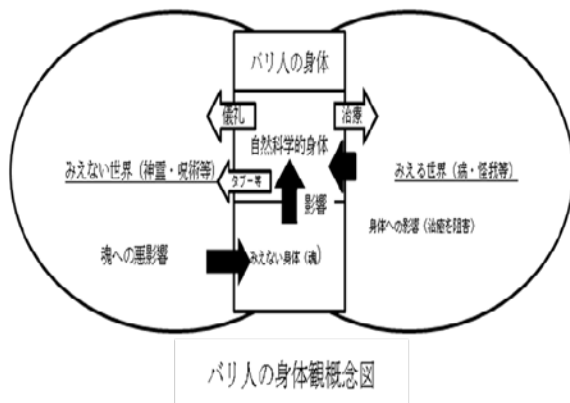
この2008年度の研究を発展させるかたちで、2011年度からの本研究がある。2011年8月から9月にかけて約3週間の調査を敢行し、バリの通過儀礼について整理分類したうえで、参与観察をおこなった。さらに従来研究史上で通過儀礼とみなされてこなかった葬送儀礼と死者の浄化儀礼がバリの人々の魂の通過儀礼であり、死生観と「社会的成長」に密接にかかわり合っていることを解明した。

さらに2013年3月に17日間のバリへの現地調査をおこない、呪術医のもとでの治療儀礼の事例収集および周期儀礼であるガランガン儀礼において祖霊がどのように奉じられ、どのような用語が使用されるかの語彙整理をおこなった。

バリの人々は「自然科学的身体」だけではなく、魂という「みえない身体」までも「成長」という概念を用いて儀礼をおこなっている。「みえない身体」の成長は生きて

いる間のみならず、死後も続くバリの人々は考え、そしてその成長を促しているのが儀礼であることが明らかになった。

また受療行動についても同時期に調査をおこなっており、近代医療と民俗医療の使い分けの各種事例や身体の自然科学的治療と儀礼的ケアがいかにして共存しているのかという事例、民俗医療者と利用者との関係が維持される共通概念とは何なのか等の事例を現在収集している。これらのデータから、生物学的身体と「みえない身体(魂)」がどのように「健康観」や「病観」を構築しているのかを現在考察している。



上記研究の結果は、インドネシアにおける近代医療の普及や開発医療に関しても敷衍できる研究であり、また実学としても応用でき得る成果と考えている。

本年度、申請する研究では上記の図をさらに多くの事例で精緻化し、また死後のみえない身体(魂)の成長についても明らかにする必要があると考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

- ① 村田敦郎、儀礼の諸相と身体観 ―バリ文化における心身二元論の展開、学際連携研究 文化と社会、査読有、1巻、2013年、pp.3-18
- ② 村田敦郎、民俗世界における儀礼と身体観に関する一考察 ―バリ島東部の事例から、学際連携研究 公共と社会、査読有、1巻、2012年、pp. 37-47

〔学会発表〕(計2件)

- ① 村田敦郎、バリにおける受療選択と民俗医療の関係性についての一考察、総合人間科学研究会 2012年度研究大会、2012年12月8日、大阪体育大学
- ② 村田敦郎、民俗世界における心身二元論と社会的成熟についての考察 ―バリ島東部の事例から、総合人間科学研究会

2012年度研究大会、2011年12月9日、大阪体育大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

村田 敦郎 (MURATA ATSURO)
北海道教育大学・教育学部・准教授
研究者番号：80442060

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし